

秋期大会シンポジウム特集

JCuIP 発足記念「グローバル化する日本文化」

スペインにおける日本文学の翻訳事情

ピタルク・フェルナンデス パウ

スペインにおける日本文学の翻訳を考える時、大事な転換点として2005年に触れないといけないでしょう。それは、あの有名な小説の翻訳版がスペインで初めて出版され、大ヒットになった年だからです。あの有名な小説というのは、いうまでもなく、あの『東京ブルース』のことです。そうですね、『東京ブルース』という本です。西田佐知子の1964年のヒット曲とは関係ないです。淡谷のり子の1939年の曲でもありません。村上春樹の長編小説の話です。「村上春樹って、『東京ブルース』という長編小説を書いていたっけ？」と混乱している方の気持ちはよく分かります。私も、2005年のある日、同じく怪訝な顔で「Haruki Murakami *Tòquio Blues*」と書いてある表紙の本を見ていたのです。

その頃、村上春樹の長編小説なら私はほとんど英訳で読んでいました。だから、バルセロナのある書店の話題本のコーナーに置かれたその『東京ブルース』という本を発見した時、村上春樹の最新作かと思いきや素早く手にしました。そしてよく見ると、不思議だったのはタイトルだけではなかったのです。表紙のイメージはポップアートの浮世絵で、サングラスをかけた芸者の顔でした。きっと村上氏がファンタジー的時代物に挑戦したのだらうと考えながら、原作のタイトルが記載してあるページをめくり、非常にビックリしました。『東京ブルース』の原題は『ノルウェイの森』だったのです。

村上氏の『ノルウェイの森』が、如何にしてスペインで、サングラスをかけた芸者を表紙にした『東京ブルース』になったのかを理解するには、それ以前のスペインでの日本文学の紹介の状況を考える必要があります。2005年に、村上春樹はスペインの読者にとって未知の作家だったわけではありません。1992年、『羊をめぐる冒険』（『*La caza del carnero salvaje*』、Tusquets出版社）がFernando Rodríguez-Izquierdo 訳で出ていました。しかし、その時は村上氏の小説はあまり注目を集めず、21世紀になるまでその他の翻訳は見られませんでした。その後2001年から、『*Crónica del pájaro que da cuerda al mundo*』（『ねじまき鳥クロニクル』、Tusquets出版社、Lourdes Porta Fuentes・Junichi Matsuura 共訳）、『*Sputnik, mi amor*』（『スプートニクの恋人』、Tusquets出版社、Lourdes Porta Fuentes・

Junichi Matsuura 共訳)、『Al sur de la frontera, al oeste del sol』(『国境の南、太陽の西』、Tusquets 出版社、Lourdes Porta Fuentes 訳)が続々出てきました。

その流れを受け、2005年になって出版社が、次は2002年の『海辺のカフカ』ではなく、1987年まで遡り、日本で当時ベストセラーになった『ノルウェイの森』を出すことにしたようです。スペイン語版の翻訳者は同じ Lourdes Porta Fuentes 氏で、カタルーニャ語版は Albert Nolla Cabellos 訳でした。

『ノルウェイの森』をスペイン語訳する時、翻訳版のタイトルとしていくつかの候補が考えられます。最も簡単なのは、原題の由来であるビートルズの名曲『Norwegian Wood』のタイトルをそのまま英語で付ける可能性です。もう一つは、ビートルズの曲の日本語タイトルとして定着してきた『ノルウェイの森』をそのままスペイン語にして、『Bosques de Noruega』で行くことでした。ちなみに、Porta 氏の話によると、翻訳者として出版社に提案した翻訳版のタイトルはそれでした。最後は、『Norwegian Wood』の日本語訳を無視して、ビートルズの曲を直接スペイン語に訳し、『Madera noruega』(「ノルウェイ産の材木」)にすることでしょう。

しかしその時、スペイン語版も、カタルーニャ語版も、翻訳版のタイトルをこの三つの候補から選ぶのではなく、『東京ブルース』にしました。それはなぜでしょうか。(ちなみに、1993年に Feltrinelli 出版社によって発行された Giorgio Amitrano のイタリア語訳も同じタイトルでした。)

一般的に言えば、翻訳版を改題することは珍しいとは言えません。同じく『ノルウェイの森』の場合は、Ursula Gräfe の独訳は『Naokos Lächeln』(『直子の笑顔』、DuMont 出版社、2001年)というタイトルで出ましたし、Rose-Marie Makino-Fayolle の仏訳は『La ballade de l'impossible』(『不可能のバラード』、Belfond 出版社、2007年)に改題されました。特に原題が難解と思われる場合、「分かりやすい」タイトルに変えることは多いです。例えば、つい最近翻訳された作品に多和田葉子の『雪の練習生』(新潮社、2011年)があります。「練習生」に当たる単語は通常のスเปน語にはありませんので、翻訳版は『Memorias de una osa polar』(『北極熊の回想記』、Anagrama 出版社、2018年、Belén Santana 訳)として発表されたのです。翻訳版のタイトルを読むと、主人公は北極熊だと分かって、読者もある程度どんな話か想像できるでしょう。

しかし、『東京ブルース』という改題は、『北極熊の回想記』と比べると、作品の話を読者により明確に想像させるための改題ではなく、別の理由があったと考えられると私は思います。先ほど申し上げた独訳のタイトルも仏訳のタイトルも、ある程度読者の想像を容易にすることを目指していたかもしれませんが、『東京ブルース』はおそらく違うでしょう。なぜなら、『ノルウェイの森』の舞台

は「東京」であっても、「ブルース」と作品の内容との関係はどう考えてみても薄いとしか言えないからです。

この奇妙な改題の謎を解くには、あのサングラスを掛けた芸者の表紙と合わせて考える必要があるでしょう。先ほど挙げた翻訳版のタイトルの候補の全てに欠けているのは「日本」というイメージです。『Norwegian Wood』、『Bosques de Noruega』、『Madera noruega』のどれをとっても、すぐに読者に「これは日本の小説だ!」という印象を与えるものではありません。独訳と仏訳の改題も、小説の内容とある程度近いですが、舞台が「日本」だとは直接伝わらないのです。つまり、『東京ブルース』として出版社が売ろうとしていたのは、村上春樹の小説より、「日本」の小説だったと言えるでしょう。

この解釈は過言と思われるかもしれませんが、面白いことに、この小説がスペインで大ヒットになると、『東京ブルース』というタイトルも、表紙も変わりました。翻訳版の重版からタイトルは『Tokio Blues. Norwegian Wood』(スペイン語版)・『Toquío Blues. Norwegian Wood』(カタルーニャ語版)になりました。「サングラスを掛けた芸者」も表紙から消えて、カタルーニャ語版の初版以来、行方不明になりました。「Haruki Murakami」そのものがスペインの読者にとって親しみのあるブランドになって初めて、『ノルウェイの森』はスペインで「日本の小説」ではなく「村上春樹の小説」になったと言えるでしょう。

すでに『東京ブルース』として出版されていましたので、タイトルにその言葉は残されましたが、『Norwegian Wood』を付け加えたのは、村上春樹の作品全体との関連性を捨ててはいけないと出版社が考えたからでしょう。例えば、読者が『東京ブルース』を読んで村上氏についてインターネットで調べた時、『ノルウェイの森』を見つけて『東京ブルース』とは違う小説だと誤解してしまうことを防ぐためなどです。

それ以降、スペインで村上春樹の小説の翻訳が続き、今年出た最新作の『騎士団長殺し』(新潮社、2017年)を除けば、今は翻訳版で読めない村上氏の長編小説はありません。また、2巻あっても、『騎士団長殺し』のスペイン語訳はそんなに遅れないと思います。その前の『女のいない男たち』(文藝春秋、2014年)という短編集も、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(文藝春秋、2013年)という長編小説も、原文が出版された一年以内にスペイン語版が出されました。どちらの場合も、英訳よりスペイン語訳の方がはるかに早かったのです。

村上春樹氏の作品は、スペイン語に加えて、ほかのスペインの言語にもかなり翻訳されています。カタルーニャ語訳を発行する Empúries 出版社の他、Galaxia 出版社は Gabriel Álvarez Martínez のガリシア語訳を3冊出しています：『Tras do

solpor] (『アフターダーク』)、『Do que estou a falar cando falo de correr』 (『走ることについて語るときに僕の語ること』)、『IQ84』 (Mona Imaiとの共訳) です。また『アフターダーク』は、『Gauaren sakonean』 (『夜の奥底で』、Erein 出版社、2009年) という Ibon Uribarri Zenekorta のバスク語訳でも読むことができます。

話は長くなりましたが、『ノルウェイの森』が「サングラスを掛けた芸者」の表紙の『東京ブルース』になったことは、2005年以前のスペインでの日本文学紹介を考えるとある意味で象徴的な話であると言えます。要するに、ある程度ステレオタイプ化された「日本」のイメージが中心だったということです。それ以降、そのステレオタイプ化された「日本」のイメージが完全になくなったわけではないですが、翻訳が重ねられることで、日本文学はある程度スペインの読者にとって「普通」の文学になり、そのエキゾチシズムを強調する出版社はかなり減ってきました。

その傾向の事例として、2015年から Lapslàtzuli 出版社が出版してきたカタルーニャ語翻訳版 (Ko Tazawa・Joaquim Pijoan 共訳) の近代日本文学シリーズが挙げられます。まず初めの2冊として、樋口一葉の『たけくらべ』と森鷗外の『阿部一族』が出されました。その翻訳版のタイトルは『A veure qui és més alt. Midori, una petita geisha』と『Harakiri. El cas de la família Abe』になりました。ご覧の通り、原題の翻訳に「geisha」や「harakiri」という「国際的日本語」を加えて、おそらく先ほど申し上げた「日本的」なイメージで読者にアピールしようとしていたことが分かります。

しかし、それ以降、シリーズがある意味で安定してからは、翻訳版のタイトルは何も付け加えられない原題の翻訳になっています：夏目漱石『夢十夜』 (『Deu nits, deu somnis』、2016年)、谷崎潤一郎『春琴抄』 (『Història de Shunkin』、2017年)、芥川龍之介『羅生門』 (『Rashōmon』、2017年) などです。言い換えると、ステレオタイプ化された「日本」のイメージに頼らずに、各作品の独自の特徴でアピールしようとしているのでしょう。

では、転換点としての2005年に戻りましょう。次の表を見ると、この年の重要性が分かります。

年	翻訳数 (スペインの各言語に)
1964年以前	22
1965-1974	13
1975-1984	23
1985-1994	55
1995-2004	76
2005-2014	356

データ源：Alba Serra Vilella 著、『La Traducció de llibres japonesos a Espanya (1900-2014) i el paper dels paratextos en la creació de l'alteritat』（博士論文）、Universitat Autònoma de Barcelona、2016年、157頁。

Serra 氏の研究は2014年までにとどまるのですが、2015年から2017年までの数字を私が計算してみると、最近の三年間に114冊も翻訳されたことが分かりました。つまり、一年間平均38冊になって、2005年～2014年の年間ペースは更にスピードアップしていると言えるでしょう。

2005年以降、大きく変わったのは翻訳の数だけではなく、その翻訳の質でもあります。大まかに言うと、2005年以前のスペインにおける日本文学の翻訳は「二次的」翻訳活動でした。というのは、スペインで翻訳された日本文学作品は、先に他の言語（主に英語とフランス語）に翻訳されて、既にある程度国際的に話題になっていた作品しかありませんでした。それに比べて、2005年以降は、「一次的」になり、他の翻訳に頼らず、自発的に翻訳することになったと言えるのです。では2005年以前のスペインにおける日本文学の翻訳の質はどうだったでしょうか。

初めてスペインで翻訳された日本の文学作品は、徳富蘆花の『不如帰』（1898－1899年）という小説でした。『Nami-ko』に改題されて、スペインの Maucci 出版社から1904年に出版されました。翻訳者名として「Juan Cañizares」が載っています。しかも、1945年までに『不如帰』のスペイン語訳は三つも出版されています。Maucci 出版社バージョンの他、1923年、Rivadeneira 出版社から『¡Antes la muerte! Novela japonesa』（『死んだ方がマシ！ 日本の小説』）に改題したバージョンもありましたし、1945年、Reguera 出版社からまた『Nami-ko』というタイトルのスペイン語訳が出ました。これらの作品は重版ではなく、完全に別の翻訳でした。Rivadeneira 出版社の場合は翻訳者名として「J. F. de A.」というイニシャル名しか載っておりませんが、Reguera 出版社の方は「Jorge Manrique 訳」と書いてあります。

1904年から1945年までスペインで『不如帰』の翻訳が三つも出たと聞くと、おそらく、スペインで相当な日本文学ブームがあったのだらうと思われるかもしれませんが、決してそうではありませんでした。徳富蘆花は翻訳されましたが、尾崎紅葉、幸田露伴、夏目漱石、森鷗外など、同世代の代表的な小説家はスペインでは紹介されませんでした。

実は、『不如帰』の他、1904年から1945年まで日本の小説は3冊しかスペイン語訳が出版されていないのです。1908年、Fernando Fe 出版社が為永春水・2世為永春水著『いろは文庫』のスペイン語訳を『Los 47 capitanes: Novela trágica』

(『47人の大尉 悲劇小説』) というタイトルで出版しました。改題から推測できるように、『いろは文庫』というのは「忠臣蔵物」です。1941年、Juventud出版社が『Genji Monogatari: Romance de Genji』(Fernando Gutiérrez 訳)と『La guerra y el soldado』(火野葦平、『土と兵隊』、1939年、José Lleonart 訳)を出しました。

以上にあげた翻訳の共通点はすべて重訳であるということです。つまり、日本語の原文が直接スペイン語に翻訳されているのではなく、日本語から別の外国語にされた翻訳文がスペイン語にまた翻訳されたものであるという意味です。『不如帰』の場合は、『Nami-ko』という2冊は、1904年にアメリカのH. B. Turner出版社から出た『Nami-ko: A Realistic Novel』という「Sakae Shioya and E. F. Edgett」の英訳からの重訳で、『Antes la muerte! Novela japonesa』は1912年にフランスのPlon-Nourrit出版社によって発行された『Plutôt la mort: Roman japonais』という「Olivier le Paladin」の仏訳からの重訳でした。『Genji Monogatari: Romance de Genji』というのは、ご想像のとおり、有名な『源氏物語』のArthur Waley英訳(『The Tale of Genji』、George Allen & Unwin、1925年-1933年)の重訳です。『La guerra y el soldado』はLewis Bushの英訳(『Mud and Soldiers』、研究社、1939年)の重訳です。

20世紀後半に入り、次々新しく話題になった作家の作品が翻訳されるようになってからも、スペインの出版社側の日本文学に対するポリシーは、20世紀前半とそれほど変わりませんでした。翻訳された作家の数は増えたといっても、スペインの読者の中の全体的な日本文学のイメージはまだ薄かったでしょう。なぜなら、スペインの出版社は、日本文学の多様性を反映する、できるだけ広い作家のラインアップを紹介するより、読者に親しみのあると思われる作家の作品を複数翻訳する戦略で行ったからです。

たとえば、1960年代に翻訳された作品を確認してみると、川端康成の作品が著しく多いことが分かります。1961年、『雪国』(『País de nieve』、Zeus出版社、César Durán 訳)が翻訳され、1962年、『千羽鶴』(『Una grulla en la taza de té』、Vergara出版社、Luis de Salvador 訳)が出ました。そして、皆さんの予想通り、川端氏が1968年ノーベル文学賞を受賞してから、その翻訳の数は増えていきました。1969年、『山の音』(『El clamor de la montaña』、Plaza y Janés出版社、Jaime Fernández・Satur Ochoa 共訳)、『古都』と『伊豆の踊子』(『Kioto. La danzarina de Izu』、Plaza y Janés出版社、Ana María de la Fuente Rodríguez 訳)と翻訳版が続きました。1970年代に入ってから、さらに『十六歳の日記』、『みずうみ』、『美しさと哀しみと』、『眠れる美女』が出版されて、翻訳版は重なっていきます。いうまでもなく、以上並べた川端康成の作品はほとんど重訳で発表されました。原文からの直接の翻訳は『山の音』しかなく、その他は仏訳、英訳、独訳からの重訳です。

このような日本人作家ミニブームは今までスペインで何回もありました。1970年代に入ってからですと、三島由紀夫がブームになっています。1963年に出版された『金閣寺』（『El pabellón de oro』、Seix Barral出版社、Juan Marsé訳）の翻訳版から1986年の『サド侯爵夫人』（『Madame de Sade』、MK出版社、Francisco Melgares訳）まで14冊も出たのです。三島由紀夫の作品の場合は、1970・1980年代の翻訳はほとんど英語の重訳ですが、21世紀になってから同じ作品が日本語からの直訳でもう一度出されました。

さらに、三島由紀夫ほどではありませんが、遠藤周作も、吉本ばななも、大江健三郎（1994年ノーベル文学賞受賞）も、複数の作品が翻訳されて、スペインの読者にとって身近な作家になったと言えます。ただ、どの場合でも、作家が個人として紹介されてきました。つまり、川端康成がブームになっていても、その波に乗って志賀直哉や横光利一が紹介されることはありませんでした。三島由紀夫が売れていても、石原慎太郎や吉行淳之介の作品の翻訳は出ませんでした。吉本ばななのファンに、山田詠美や江國香織の小説を売ろうとした出版社もありませんでした。

さて、2005年以降のスペインにおける日本文学の翻訳活動を見ると、大きく変わった点はいくつかあります。先ほど申し上げた劇的な翻訳数の増加の他、直訳の増加もあります。重訳は消えたわけではありませんが、1990年代から直訳の数は徐々に増えてきて、今ではスペインで出版される日本文学の翻訳の過半数になっています。それに加えて、村上春樹ブームを可能にしたのは、スペインにおける日本文学専門のインディーズ出版社の台頭です。

最近スペインでの日本文学の紹介に一番貢献してきた出版社は、大手出版社ではなく、インディーズ出版社です。その中で、日本文学専門と呼べる出版社が三社あります。三社とも、自分の業績を作り上げ、積極的に新しい著者を紹介し、スペイン語で読める日本文学の形を拡大してきました。

最初に、2007年にできたSatori出版社があります。日本関係ならば、文学もノンフィクションも出版しますが、特に古典や近代文学が中心となっています。平安時代の日記文学や江戸時代の俳句から日本SF文学短編集まで、カタログの幅は非常に広いです。Satori出版社が初めてスペインで紹介した作家として、泉鏡花、幸田露伴、林芙美子などを挙げるができます。

次に2009年に開業したQuaterni出版社があります。この出版社は純文学も出版したことがありますが、専門はミステリー、ホラーと歴史小説です。岡本綺堂、横溝正史、山田風太郎、藤沢周平、京極夏彦などを初めてスペイン語に翻訳した出版社です。

最後は2014年から電子書籍専門家として活躍してきたChidori Books出版社で

す。近代文学の他、子供向けの作品を中心に紹介しています。

大手出版社と違って、これらの日本文学専門家のインディーズ出版社は、積極的に新しい著者・作品を紹介しようとしています。例えば、Quaterni出版社は2015年に『La hija de los piratas Murakami』（Isami Romero Hoshino 訳）を出版しました。これは和田竜の本屋大賞受賞作『村上海賊の娘』（新潮社、2013年）のスペイン語版です。わずか二年間で、その時までスペインで紹介されていなかった作家の作品が翻訳されたことに驚きますが、さらに2005年以前を考えると信じられないのは、和田氏の作品はまだ英訳や仏訳では出ていないということです。つまり、昔のように、他の翻訳を待って、海外でどれくらい話題になっているかを確認してから翻訳権を求めるのではなく、Quaterni出版社は自発的に和田氏の作品をスペインで紹介することにしたのです。大手出版社より自発的に翻訳に値する新しい作品を探すことによって、インディーズ出版社は日本文学とスペインの読者の距離を縮めようとしていると言えるでしょう。

さらに、インディーズ出版社の活躍を可能にしているのは、日本の著作権法です。スペインでは著作権保護期間は80年間以上ですが、日本の場合は、比較的短い50年間となります。そのおかげで、文学的に非常に豊かな大正時代の作品などは、日本での著作権が消滅して、インディーズ出版社にとって翻訳権の取得の手続きが容易になっているのです。

次の表で、過去三年間の翻訳を原文の著作権によって分けてみました。

年	著作権消滅	著作権存続	合計
2015	19	16	35
2016	28	17	45
2017	21	13	34
合計（3年間）	68	46	114

ご覧の通り、著作権が消滅した作品は6割を占めています。他の言語からの翻訳のデータは持っていませんが、これは日本文学の特徴なのではないかと私は思います。

実はこの2016年の翻訳の増加は著作権とも関係があります。この年、1965年に亡くなった作家の作品の著作権が切れたため、谷崎潤一郎と江戸川乱歩の作品は日本でパブリックドメインになりました。そのお陰で、スペインで両氏がミニブームになりました。谷崎潤一郎の場合は、7冊も翻訳されました。そのリストは以下の通りです：①『Cuentos de amor』（短編集、Alfaguara出版社、Akihiro Yano・Twiggy Hirota共訳）、②『El club de los gourmets』（『美食倶楽部』、Gallo nero出版社、Yoko Ogihara・Fernando Cordobés共訳）、③『La sociedad

gastronómica y otros cuentos』(短編集、Quaterni出版社、Isami Romero Hoshino 訳)、④『La historia de un ciego』(『盲目物語』、Satori出版社、Aiga Sakamoto 訳)、⑤『Sobre Shunkin』(『春琴抄』、Satori出版社、Aiga Sakamoto 訳)、⑥、『La vida enmascarada del señor de Musashi』(『武州公秘話』、Satori出版社、Fernando Rodríguez-Izquierdo y Gavala 訳)、⑦『El elogio de la sombra』(『陰翳礼讃』、Satori 出版社、Francisco Javier de Esteban Baquedano 訳)。

江戸川乱歩の場合、次の4冊でした：①『Los crímenes del jorobado』(『孤島の鬼』、Quaterni出版社、Ismael Funes Aguilera 訳)、②『El lagarto negro』(『黒蜥蜴』、Salamandra出版社、Lourdes Porta Fuentes 訳)、③『La mirada perversa』(短編集、Satori出版社、Daniel Aguilar 訳)、④『El extraño caso de la isla Panorama』(『パノラマ島奇談』、Satori出版社、Yoko Ogihara・Fernando Cordobés 共訳)。

出版社名を見ると分かるように、大手出版社としては、ペンギン・ランダムハウス・グループの下にあるAlfaguara出版社しか見られません。つまり、このチャンスに飛びついたのはインディーズ出版社だったのです。環太平洋パートナーシップ協定(TPP)交渉の関係で、アメリカに合わせて、日本も著作権保護期間を延長するだろうとこの数年間言われてきましたが、まだ具体的な決断は出ていません。そのような変更があれば、スペインで日本文学の紹介の仕事をしているインディーズ出版社の活躍に大きな影響を与えることが考えられます。2022年に、スペインで未紹介の志賀直哉がやっとスペイン語で読めるようになるだろうことにも影響を与えるに違いありません。

過去十年間で、スペインでの日本文学の立場は大きく変わったと言えるでしょう。作品の選択も、その紹介の仕方も、エキゾチシズムに偏った「二次的」翻訳活動から、自発的で「一次的」な翻訳活動になってきました。これからも、より多くのスペイン人が豊富で多彩な日本文学に出会えることを望んでいます。